

・優秀賞

笑顔のおじいさん

甲田中学校（青森市）

三年 長尾 茉佑

私が一番好きな食べ物は、白いご飯です。小さい頃の私は、ご飯を食べることが苦手で保育園や小学校でも給食時間は憂鬱な時間でした。そんな気持ちで食べた給食はよく残し、体も周りの子よりも小さかったです。

そんな私がご飯が好きになったきっかけは何かと考えたら、一人のおじいさんの顔が思い浮かびました。

四、五年前まで私の家の隣には田んぼが広がっていました。五月、ゴールデンウィークの頃に田植えが始まり、田に水が入ります。夏の夜は蛙の合唱が一晚中鳴り響き、窓の網戸に蛙がくっついていて驚く、それが私の日常でした。つばの広い麦わら帽子を被り、長ぐつを履いたおじいさんがその田んぼを管理していました。おじいさんは、朝は「おはよう」「いってらっしゃい」、夕方は「おかえり」と顔を合わせるといつも言ってくれました。おじいさんは秋の稲刈りまで休むことなく、ほぼ毎日田んぼにいました。「稲の花が咲いたよ。」「田んぼにアメンボがいるんだよ。」「米作りの一部を知らず知らずのうちに教えてもらっていたのだと、今になったら分かります。」

ようやく米作りの大変さを理解できる頃に、家の隣に広がっていた田んぼは住宅地になりました。田がなくなると、田に入る水

の音、夏の蛙の鳴き声を耳にせず、網戸に張り付く蛙の姿も見なくなりました。私の日常に変化が生まれました。そこで初めて米が身近な存在ではなくなってしまうように感じました。

おじいさんが米作りをやめてしまった理由を私は知りません。農家の高齢化や人手不足などが原因で、日本の農家は減少しているのと知りました。ほぼ毎日屋外で作業し、夏は暑いという労働条件で農家になろうと思う若い人は多くないと思います。今はパンや麺類などを食べる人も多くなり、米を三食食べている人は減ってきてしまいました。米から離れていった若者が増えたことによって、米の価格にも影響し、農家をやめてしまう人が増えたのかもしれません。

そんな中、最近の気候変動による夏の猛暑と水不足により、米どころとされている地域で不作となり、店舗では米が品薄になり、一部では販売していない店もあるそうです。近所のスーパーでも米は一人一袋までとお知らせの紙が貼ってありました。遠くない将来、おいしい米を毎日食べられることは、当たり前ではなくなっているのかもしれない。

私は、今でも時々白いご飯を食べると、田んぼの管理を大変でも一人で楽しそうにし、笑顔で話しかけてくれたおじいさんの姿を思い出します。体育館の半分くらいある敷地に広がっていた青々とした田んぼの中で腰が曲がったおじいさんが一所懸命に作業し、稲刈りが終わると太陽のような笑顔を見せてくれました。一人でも多くの人に、こんな姿で働いた人がいたのだと知ってほしいし、興味を持ってほしいと思います。そして私はあのおじいさんの姿を忘れずに覚えていようと思います。

お米を毎日食べられることに感謝し、日本人の温かみを感じられる米が、五十年、百年先もずっと続いてほしいと思っています。

・優秀賞

母の思い出

明治中学校（八戸市）

二年 及川 明李咲

「おばあちゃんの作ったおにぎり食べたいな」
そう言うと、母はそっとお墓に手を合わせました。母のおばあちゃん、私にとつてのひいおばあちゃんです。私が生まれる前に亡くなったので会ったことはありません。

母は、おばあちゃんが大好きで、いつもひいおばあちゃんの話をしてくれます。ひいおばあちゃんは旅館の女将さんだったので、料理がとても上手だったこと、しつけがとても厳しかったこと。疲れて帰ってきた母を見て、夕飯前にこっそり作ってくれた「ごま塩の焼きおにぎり」の話をよく話して教えてくれます。内緒で作ってくれた、素朴でちょっとかために握られた大きなごま塩の焼きおにぎりが大好きだったと。具には網で焼いた鮭、そして、ごま塩を混ぜ込んだご飯を両手いっぱい握り、網で焼きます。所々に焦げ目がついた香ばしい香りのおにぎり。大好きなおばあちゃんが握ってくれた、大好きなおにぎり。何年も前に亡くなったおばあちゃん。でも、今でもしっかりと味は思い出せるそうです。母は、おばあちゃんが作ってくれていたおにぎりを、愛情の深さも分らず、ただ美味しいということだけ思い、当たり前のように食べていた。ありがたさと感謝の心で食べていたのではなかった。でも、おばあちゃんが亡くなる少し前、母が美味しそうに喜んで食べていたのを見て、おばあちゃんは嬉しくて作っていたのだと知り、その思いに気付き、心の底から「ありがとう」の気持ちがこみ上げてきた経験を話してくれました。

誰かが自分の為に握ってくれたおにぎり。母は、おばあちゃんが握ってくれたごま塩おにぎりのような味にはなかなかならない。生きているうちに作り方を聞いておけば良かったな。と言っていました。私は母が作ってくれたごま塩おにぎりが大好きです。ひいおばあちゃんのおにぎりは食べて事がありません。でも、私にとつても、普通の、特徴もなく、素朴なおにぎりだけれど、でも母のおにぎりが一番です。おにぎり一個でも、人との絆や心の絆をより深めていくてくれる。そして、心の成長をさせていくものだと思います。ひいおばあちゃんにしか出せない味、おばあちゃんにしか出せない味、母には母だけの味。そして家族にバトンタッチ。母のおにぎりを食べながら、すごく暖かい気持ちを感じます。結婚した姉が帰ってくると、母は、

「何食べたい？」

と聞くと、姉は、

「ごま塩の焼きおにぎり」

と迷わず答えます。

私が元気がない時は、何も言わずに握って焼いてくれます。香ばしい匂いがしてくると少しづつ元気が出てきます。保育園の頃、「お母さんが作った料理の中で何が一番好きですか？」という先生の質問に、張り切って

「ごま塩の焼きおにぎり」

と言ったのを今でもはっきり覚えています。

私たちにとっては母のおにぎりが思い出の味になる。私にだって作れる素朴な味と形のおにぎり。でもやっぱり何か違う。何度真似をしてみても、同じ材料を使ってみても同じ味にはならない。母も、そんな気持ちだったのだろうと初めて思いました。その人にしか出せない味。愛情の入りが違うから。母は、

「学校から帰ってきて宿題の前に作ってくれたあのおばあちゃんのおにぎりをもう一度食べたいな。」

と話すけれど、もう二度とおばあちゃんの手で握ったあのおにぎりは食べられないし、出会えない。でも、母のおにぎりは私たちにしっかりと受け継がれていくよ。今度は、お姉ちゃんや私が母のごま塩おにぎりを受け継いでいきたいと思います。

・優秀賞

幸せな時間

三内中学校（青森市）

一年 館田凜音

私の父と祖父と祖母は以前お寿司屋を営んでいた。寿司と言えばネタと呼ばれる魚とシャリと呼ばれる酢や砂糖などを入れて作る酢飯だろう。父達が営んでいた寿司屋のシャリは他の店と比べ物にならない程砂糖を入れていた。

小学校のころ学校から帰り、荷物を置いてカウンターに座ると、つけ場に立っている何かを察したような笑顔を浮かべる祖父に向かって私は口を開く。

「じい、マグロ五貫!。」

「はいよ。」

祖父の返事から数分後、頼んだマグロがつけ台に置かれる。祖父の握る甘いシャリとマグロが合わさった鉄火を食べるのが小さいころの日課だった。持っても崩れない、でも硬すぎない祖父にかかせない私の大好きな握り加減。その寿司を食べる度に、

「凜音。寿司は握る人によって硬さが変わってくる。無論お父さんとじいも違う。その人にしか出せない柔らかさと硬さをしっかりと堪能しながら食べるんだよ。」

と、父と話した日のことを思い出す。とても印象深く、記憶に残っていた父との会話。今でも寿司を食べる時には何回も何回も噛んでから飲み込む。何回も噛むとシャリと魚の旨味が口内に広がり、もっと美味しくなる。でも、何十回、何百回と噛んで旨味を味わっても私の中で祖父の握った寿司の美味しさに勝てる寿司には一度も出会ったことがない。私の中で祖父が握ってくれた鉄火寿司

の美味しさは小さいころからずっとピカイチであり続けている。

私の家では週に六回程は店で祖父が作ってくれた夕食を食べていた。祖父の握った寿司を食べて宿題をして祖母の元へと向かう。店を裏方として支えている祖母は店の奥にある厨房に立っていた。私は祖母の元へと行く度、

「今日の夜ご飯何?。」

とお決まりの質問をする。すると、祖母は、毎日違う回答をしてくれる。そんな祖母は私の憧れだった。祖母の回答を聞いてから車に乗って買い物へ向かう。スーパーに着いてからは分担作業。祖母に頼まれた物を持ち、集合場所に急いで向かう。憧れの祖母の手伝いが出来ていると思うだけでとても嬉しい気持ちだった。帰ってからは買った物を定位置に置き、祖母の夕食作りの手伝いをする。祖母と他愛のない会話が出来るとこの時間が私はとても好きだった。料理が完成してから居間に戻る。そのころには兄も母も帰ってきていてすぐに食事がスタートする。祖母と作った料理の美味しさを一口一口噛みしめながら、家族と今日あったことの報告やテレビを見たりなど色々な事をする。皆で笑いあったりすることができる食事の中の家族団らんの時間もとても大好きな時間だった。ご飯を食べ終えたら祖父と父が立っているつけ場がカウンターに向かう。寿司屋にはお客さんと楽しく話すためのコミュニケーション力も必要だ。そのせいか祖父や父と話す時はいつもより話すのが楽しかった。

私は、美味しいご飯を食べながら、家族と本音で話してきた。それは、かけがえのない時間であり、幸せな思い出でもある。美味しい物を食べると幸せホルモンのオキシトシンが分泌されると聞いたことがある。人が幸せになると必然的に場の空気も和む。そうなると言いくかったことも少しは言いやすくなるかもしれない。言いくかったことを伝えるだけでコミュニケーションにもつながる。

そんな家族とのコミュニケーションをする場を作ってくれた家族に私はとても憧れている、感謝している。何十年後でもいいから食事を通して幸せな時間を与えてくれた祖母や祖父、父のような人に私はなりたと思う。

・優秀賞

お米作りの大変さ

柏中学校（つがる市）

二年 成田光雅

私の春は、祖父母の農園で始まります。家族と親戚が集い、お米作りの大切な第一歩を踏み出します。私たちは約千五百枚の苗床を作り、それぞれに土を入れ、お米の種をまき、水をやります。この作業は、機械の助けを借りつつも、多くの手作業が必要です。十人ほどで協力し、一つ一つの苗床を丁寧に作り上げていきます。

作業の途中で休憩を取り、パンやお菓子を食べながら、ほっと一息つきます。十五分の短い休憩の後、再び作業に戻ります。苗床に土と種、水を入れ終わると、昼休憩に入ります。昼食を取りながら、大叔父と学校の話や世間の話題に花を咲かせます。「最近、社会科で何を学んでいるの?」や「何か夢中になっているの?」など、普段はなかなかできない会話を楽しみます。

昼休憩が終わると、苗床を軽トラックに積んでビニールハウスへ運びます。ビニールハウスは少し遠いため、移動も一苦労です。到着すると、約千五百枚の苗床を手渡しリレーで並べていきます。最後の作業は体に負担がかかりますが、終えた時の達成感は格別です。

お米作りには多くの人と時間が必要ですが、それによって得られるものもあります。それは、普段話す機会のない人たちとコミュニケーションを取ることができるということです。日常生活で何

をしているのか、学校はどうかなど、初めて知ることや共感できることがあります。

私は野球部に所属しており、チームの顧問の先生からはコミュニケーションの重要性をよく教わります。お米作りの際に大叔父と話をすることで、さまざまな情報を共有する機会が生まれます。そして、協力の大切さを学びます。お米作りには声を掛け合い、協力して作業を進めなければなりません。そうしないと、苗床が軽トラックに積み上げる際に詰まったり、土が足りなくなったりするトラブルが起こります。そのために、時間がかかって一日で終わらないこともあります。だからこそ、協力することが非常に重要です。お米作りを通じて、様々なことを学ぶことができます。私は以前、人と話すのが苦手でしたが、親戚との会話の機会が増え、人と話すことが楽しくなりました。今ではお米作りがとても楽しみです。お米作りの大変さを知ったことで、お米を食べることに感謝し、無駄にしないよう心がけています。そしてこれからも祖父母の手伝いをしてお米作りを続けていきたいと思っています。

さらに、農作業を通じて自然との触れ合いも大切にしています。春の訪れを感じながら、田んぼの中で過ごす時間は、私にとって特別なものです。鳥のさえずりや風の音、土の香りに包まれながら、自然の一部として働くことは、心を豊かにしてくれます。

また、祖父母からは農業の知識や技術だけでなく、人生の教訓も学びます。祖父母の経験談やアドバイスは、私にとって貴重な財産です。彼らの話を聞くことで、困難に立ち向かう勇氣や忍耐力を養うことができます。お米作りの過程で感じる達成感や喜びは、他の何にも代えがたいものです。

このように、私の春は祖父母の農園で始まり、多くの学びと喜びをもたらしてくれます。お米作りを通じて得られる経験や知識は、私の人生において大切な宝物です。これからも祖父母と共にお米作りを続け、家族の絆を深めていきたいと思っています。

・優秀賞

僕の将来

明治中学校（八戸市）

一年 山田航史

僕の家は米農家です。他にもりんごやきゅうり、にんじんなど、野菜もたくさん作っています。祖父母が二人でやっていて、収穫したお米や野菜を親戚に分けています。

たくさんのお米をたった二人で行っているの、いつも大変そうだと思っていました。そこで、できるだけ手伝うようにしていました。一番大変なのは、米作りです。中でも、田植が一番大変です。泥の中に入り、腰を曲げて行う作業は本当にきついです。虫やかえるもたくさんいます。その中で作業するときは、最悪な気持ちになります。しかし、祖父母はそれを毎日しています。平日だろうと休日だろうと関係なく、朝はたいてい四時ぐらいに起きて、田んぼや山に行き、夕方遅くまで働いています。それを見ると、米作りの大変さや米農家への感謝の気持ちがわいてきます。

我が家では、いつも祖父母の作ったお米を食べています。毎日おいしく食べていて、他のお米も同じようにおいしいものだと思っています。しかし、先日初めて、レンジで温めて食べるパッくのご飯を食べることがありました。そのご飯を食べて驚きました。いつも食べている祖父母のお米と全く違うからです。味も大きさも、食感も全く違い、あまりおいしいとは思いませんでした。スーパ―などで売られているご飯を初めて食べてみて、祖父母の作るお米のおいしさを実感することができました。

それ以来、米作りに興味をもつようになりました。自分から手伝えたいと祖父に頼み、二週間に一度は手伝うようにしました。先日の日曜日、気温は三十度近くありました。僕はその日も手伝いをがんばりました。しかし暑すぎてすぐにばててしまいました。クーラーをつけた軽トラックに乗せてもらい、休憩しました。一時間ぐらいで体調は戻りましたが、祖父母はまだ作業を続けています。二人の体力と気力に圧倒されました。その後しばらくして二人が戻ってきました。二人とも汗びっしょりでした。僕は祖父母に、

「こんな暑い中作業して大丈夫？ 体調はどう？」

と、聞きました。すると二人は、
「大丈夫だよ。みんながおいしく食べるためにやっているんだから。」

と言いました。その言葉を聞いて僕は、二人にあがれと尊敬の気持ちを抱きました。

僕の姉は、北海道で農業の先生をしています。僕も農業に関わる仕事に就きたいと以前から思っていました。米作りの手伝いをしてみても、その気持ちが一段と強くなりました。親に聞いたところ、「おじいちゃんもおばあちゃんも、そろそろ腰が曲がってきて、重いものを持つのも大変だから、いっしょに農業をやるのもいいんじゃないか。」

とってくれました。僕は、将来祖父母のような農家になって、みんなの食べるものをたくさん作ろう、と決意しました。

僕たちが普段口に入っている食べ物、農家の方々が一生懸命作ったものです。その苦労がわかるからこそ、感謝の気持ちを忘れずに毎日おいしく食べたいと思います。そして将来は、祖父母や姉のような農家になって、みんながおいしいと言ってくれるようなお米や野菜をたくさん作りたいです。これからはたくさん手伝いをして、しっかり跡を継ぎたいです。